

2006年度秋季大会シンポジウム 「台風—伊勢湾台風から50年を経て—」の報告

はじめに

上 田 博*

来たる2009年には、1959年に伊勢湾台風が来襲してから50年目をむかえる。伊勢湾台風の被害が最も大きかった中部地区で日本気象学会秋季大会が行われる機会に、伊勢湾台風から50年の経過を振り返り、台風に関する研究の発展の現状を理解することを目的としてシンポジウムを企画した。

伊勢湾台風が台風研究と防災の原点となり、災害対策基本法の制定や台風予報に関する情報の充実が図られた。その結果、その後の風水害による死傷者数が急速に減少したことを確認しておくことは、将来の気象学の発展にとっても重要であると考えられる。しかし、近年大型台風の襲来があり、新たな形の被害の発生が懸念されている。また、大型台風の発生と地球温

暖化の関係についても議論されるようになった。これらの点を鑑みて、「被害」という観点から台風の理解を深め、台風の予報システムの将来について議論し、台風の構造に関する最近の研究を把握するとともに、地球温暖化によって台風が変わる可能性があるかどうかについて議論を深める機会を提供することは時機にかなうものであると考えられる。

本シンポジウムでは5名の方に講演をお願いした。この50年間の台風に関する研究と予報の発展を振り返り、現状の台風研究と、将来（特に温暖化した際の）台風がどのような振る舞いを示すかという問題についてわかりやすい講演をしていただけたと考えている。

A Report on the Symposium on “Typhoon—50 years since Isewan Typhoon—” at the 2006 Autumnal Assembly of the Meteorological Society of Japan

Hiroshi UYEDA*

* (Corresponding author) Hydrospheric Atmospheric Research Center,
Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan.
E-mail : uyeda@rain.hyarc.nagoya-u.ac.jp

* 名古屋大学地球水循環研究センター。
uyeda@rain.hyarc.nagoya-u.ac.jp

—2007年9月25日受領—
—2008年2月21日受理—

(Received 25 September 2007 ; Accepted 21 February 2008)

Contents

1. Teruo MURAMATSU : Starting Point of Disaster Prevention of Typhoon—50 years since Isewan Typhoon—.
 2. Taichi HAYASHI : Transition of Disaster by Typhoon.
 3. Tetsuo NAKAZAWA : For Establishment of a Two-Way Prediction System on Typhoons.
 4. Kazuhisa TSUBOKI : Structure of Typhoon Visualized by a Cloud Resolving Numerical Model.
 5. Masato SUGI : Features of Future Typhoons under the Global Warming.
-